

こどものころは、忍者に憧れていました。
仲間もみんな同じで、はじめは、
「チャンバラごっこ」
をしていたはずなのに、そのうち、
「忍者ごっこ」
になっていました。

新聞紙を丸めテープで固めて作った刀は、めんこを鋏とテープを使って加工して作った手裏剣（しゅりけん）になりました。

猿飛佐助よりも霧隠才蔵のほうが人気があったのは、猿よりも霧のほうがかっこよかったからでしょう。

いまならばさしずめ、
「ウルトラマンごっこ」
「仮面ライダーごっこ」
かもしれません。

ウルトラマンも仮面ライダーも変身するし、あれこれ凄い術をつかうので、現代の忍者かもしれません。

ウルトラマンや仮面ライダーも、いまはいろんな仲間がいて、覚えるのが大変なくらいですが、孫たちはちゃんと判っていて、あれがほしいこれがほしいと、フィギュアをほしがるのですが、メモでもしておかなければ、ちがったものを買ってしまいます。

私らのこども時代にも、
「猿飛佐助Z」
「霧隠才蔵X」

とかがいれば、キャラクターのとりっこで、ケンカになったりはしなかったでしょう。

それでもこどもながらに、火遁（かとん）の術、水遁（すいとん）の術はともかくとしても、姿を消したり、変身をしたり、分身の術とか、そんなことは現実的に無理だと解っていました。

もしそんなことができたら、忍者というよりもおばけでしょう。

つまり、忍者は架空の存在であり、現実には存在しないとおもいながらも、忍者ごっこをしていたのです。

白土三平の漫画、
『忍者武芸帳・影丸伝』

は、そんな猜疑心のつよい私らに、ようやく納得するカタチの忍者像を提示して

くれました。

ここではじめて私らは、忍者は存在したのだ、とくに戦国時代は忍者が最も活躍した舞台だったのだと、目から鱗（うろこ）状態になったわけです。

五味康祐や司馬遼太郎の初期の小説には、忍者や幻術使いが出てくるが、とても現実的な話とはおもわれないのに凄いリアリティがあって、昔はこういう不思議な存在がいたのだとおもってしまいます。

池波正太郎の小説集、
『忍者群像』

では、その不思議な存在の、さまざまな生きざま死にざまがでてきて惹き付けます。

また、おそらく織田作之助の小説中いちばん面白い、
『猿飛佐助』

には、その虚実皮膜に、あるいは嘘八百に、ただただ圧倒されてしまいます。

そしてこんどは、山田風太郎の忍者小説、
『伊賀忍法帳』
『甲賀忍法帳』

を、さかんに読むわけなんだが、これらはまた荒唐無稽（こうとうむけい）すぎて、かなりおばけに近い。

それから私らを驚愕させ、恐怖のどん底に突き落とした、
『忍びの者』。

村山知義の原作を、映画で市川雷蔵が主演、テレビで品川隆二が主演して話題を呼びました。

また、五味康祐の、
『柳生武芸帳』

を読むと、柳生一族の本流が忍びの術だとある。

もしかすると、戦国時代の群雄の浮沈の鍵を握っていたのは、忍者ではないかとおもわれます。

結句、私らは、いや私は、忍者は歴史上、まちがいなく存在したのだが、忍者とは苛酷（かこく）な修練を経て、おばけの仲間入りをしたものたちだとかんがえたのでした。

すくなくとも、当時の人々は、忍者のしわざを、おばけのしわざだとおもったかもしれません。

とまあ、そんなことが、『おばけの季節』に【忍者篇】をもうけた理由です。
なかには忍者というよりも、幻術使いとか超能力者とか大泥棒といったほうが近

いものも登場するでしょうが、これらはおばけという視点でかんがえたばあい、まあ同類ということですよ。

禿光山人 拝

* * *

「かいじいやい」
「金ちゃん、はいのはいのはい」
「ふざけとる、ばあいか」
「きょうは、ひさしぶりに、お天気なので、はい」
「かいじいは、まるで、とりじゃな」
「はい、鳥です、空を飛べない鳥」
「うそこけ、かいじいなら、そらをとべる」
「飛べません」
「だんこ、とべる。かいじいは、げんだいの、つまりその、ちょうのうりよくしゃじゃ」
「超能力なんて言葉、よく知っていますねえ」
「わしも、たまには、べんきょうするぞい。かいじいはときどき、にんじゅつを、つかうからのう」
「忍術ですか。わたしは、忍者ではありませんよ、にんにん」
「しめた、ひっかかったな、かいじいよ」
「意味がわかりません」
「にんじゃのこと、きかせろや」
「忍者はおばけではありませんよ」
「どうるいじゃ」
「そういわれれば、そういうことかもしれないが、忍術とか忍法というものは、修行が必要でして、それこそ化け物になったつもりでやる修行が」
「ほい、ばけもの、いうたじゃろ」
「口がすべっただけです」
「すべりついでに、はなせや」
「厭です」
「なぜじゃ」
「忍者の話は難しすぎます」
「わしじゃ、わからん、いうわけか」
「いえ、その、あの、天下の金ちゃんに対して、そういうつもりでは」
「ぐずぐずしとると、にんじゅつを、かけるぞい。ちちんぷいぷい」

「げっ、お許しを。話します、話します」
「それでよいのだ」
「では昼寝をした後で。今日は、ほんとにいいお天気で、最高ですね」
「ごまかすな」
「とんでもない。忍者の話は、すこし調べませんと、ごまかすことになりますから」
「ごまかしでええ。にんじゃのはなしじゃからのう」
「わかりましたよー、金ちゃん」
「かいじい、ふてくされるでない、かいじいよ。もとめよ、さらば、あたえられん」
「わたしは、求める方ですか、与えるほうですか」
「りょうほうじゃ」
「納得です、それでは下腹に力を入れて、お話ししましょう」

* * *

「【にんじゃおばけ】が、いっぱいおったのは、いつごろのことじゃらのう」
「忍者が活躍したのは、戦国時代ですね。というのは、戦国時代は、間者合戦でもあったわけで、敵の情報をどれだけとるかが、勝利に繋がるからです」
「かんじゃたあ、びょうにんかのう」
「いえ、簡単にいうと、敵の回し者で、味方の陣地にまぎれこんでいるのです」
「ならば、とるのは、じょうほうだけでは、ないかもしれんのう」
「はい、もちろん機会があれば敵の大將の首もとれた。だから、それを恐れて、影武者も一人ならず用意したといわれています」
「【かげむししゃ】というのも、おばけくさいのう」
「敵にとっても、味方にとっても、まるでおばけですね」
「ぐたいてきな、はなしを、ききたいのう」
「そうですね、例に出したいのは、大阪冬の陣、夏の陣での、徳川家康と真田幸村の忍者合戦、間者合戦ですね。家康には服部半蔵がいて、幸村には猿飛佐助と霧隠才蔵がいました」
「しっとる、しっとる。【はっとりくん】と【さるとびくん】と【きりがくれくん】じゃな」
「でも、実は服部半蔵は実在の伊賀忍者ですが、猿飛佐助と霧隠才蔵は史実にありません」
「おらんはずがない」
「ただ、猿みたいに飛べる、佐助という忍者と、煙幕（えんまく）の霧をつくって隠れる、才蔵という忍者がいた可能性はあります」
「それでいいのだ」
「従って、家康と幸村の戦いは、半蔵対佐助、才蔵ということでもあったのです」

「ほいで、てきのくびは、とったんか」

「あるとき、家康の陣地に忍び込んだ佐助と才蔵は、家康の首を狙いました。そして、才蔵が半蔵相手に戦っている隙（すき）に、佐助が家康に近づき、ついに首をとってしまいました」

「やったのう」

「けれども家康には影武者がいっぱいいましたから、その首が本物の家康のものか影武者のものか、永遠にわかってはいません」

「わからんほうが、いいばあいもあるでな」

「すでに徳川家の実権は、家康の嫡子（ちゃくし）秀忠に移っていたので、どちらでも構わなかったのかもしれない」

「かまわん、かまわん」

「佐助はそのとき、殺されたといわれています」

「けしからん、だれがやったんじゃ」

「徳川家の剣術指南、柳生宗矩（やぎゅうむねのり）」

「おお、【やぎゅうおばけ】もいたか。わしは、やぎゅうじゅうべえがだいすきじゃ」

「柳生十兵衛は宗矩の嫡男です。当代一の剣豪ですが、四十四で亡くなりました」

「よんは、えんぎが、わるいのう」

「わたしも当年にとって、四十四です」

「うそこけ」

「忍者は死ぬときに、顔を切り刻んだり、火炎に突っ込んだりしますから、死んだのがだれかは、ほんとうはわからないんですがね」

「わしも、そうしたい」

「佐助も才蔵も半蔵も、おばけ的な能力を持っているので、金ちゃんのいうとおりに【にんじゃおばけ】なのでしょうが、わたしにいわせれば、かれら忍者のおばけを使いこなした、家康や幸村のほうが、おばけ的ではありますね」

「【いえやすおばけ】に【ゆきむらおばけ】か。ええのうええのう」

「佐助の師匠は、戸沢白雲齋（とざわはくうんさい）という、甲賀忍者の草分けです」

「【うんさいおばけ】か、ええのう」

「雲齋ではなく、白雲齋です。はくをつけてください」

「【はくつけおばけ】か、ええのうええのう」

「別名、月雲齋」

「むむ、つきもうんもある【つきうんおばけ】か、ええのう」

「はあ、忍者は、透破（すっぱ）とか乱破（らっぱ）とかいわれていました」

「はあ、【すっぱおばけ】【らっぱおばけ】か、ええのうええのう」

「もしかして金ちゃん、おばけが多ければ、ええのうええのう、ではありませんか」

「あたらずとも、とおからずじゃ」

「やっぱりね。そういう発想は、危険ですよ」

「なぜじゃ」

「だって、おぼけでもない人を、ついおぼけっていう可能性があるからです。そう
なると、いじめになりますから」

「なるほどのう。はんせい、しきりじゃ」

「解ってくれましたか」

「【はっとりくん】と【さるとびくん】と【きりがくれくん】、【にんじゃおぼけ】
の、さんばがらすが、でたから、かいじいのはなしは、もうおしまいかのう」

「たしかに三羽鳥は出ましたが、じつはもっと黒い大鴉がいるんですよ」

「どいつじゃ、どいつじゃ」

「二羽いましてね、飛び加藤と、果心居士です」

「【とびかとちゃん】と【かしんこじきちゃん】かい」

「金ちゃんったらあ、かとちゃんぺと乞食って、まちがえてはいませんか」

「まちがえとらん、【とびかとちゃん】と【かしんこじきちゃん】じゃろ」

「まあいいでしょう。この二羽の大鴉は、忍者というよりも、幻術使いでしょうか」

「げんじゅつたあ、げんじつにはありえないこと、するんじゃろ」

「駄洒落（だじゃれ）っぽいけど、まあそういうことです」

「つまり、【げんじつおぼけ】ちゅうわけか」

「飛び加藤と果心居士は、超弩級（ちょうどきゅう）の幻術使いで、現代の手品と
かの話ではありません」

「そらあ、いけるのう」

「飛び加藤は、上杉謙信（うえすぎけんしん）に売り込みましたが、そのあまりの
幻術の凄さに、重臣たちも怖れをなし、殺したほうが良いということになりました」

「ほいで、ころされたんかのう」

「そのとき、最期に芸をお見せいたそうと、飛び加藤は手にしていた盃を、ゆるり
と零しました。すると、酒のかわりに零れ落ちたのは、無数の人形でして、その人
形たちが踊りはじめたのです。みなみな呆気にとられて人形の踊りに気をとられて
いると、いつのまにか飛び加藤は姿を消していました」

「むむむ、すごいのう。して、それから」

「それから飛び加藤は、こんどは武田信玄（たけだしんげん）のところに行って、
仕官しました。けれどもその幻術の凄さに、さすがの信玄もおそれをなし、飛び加
藤を殺してしまいました」

「【とびかとちゃん】は、しんだのかのう」

「おそらく殺されたとおもわせて、またどこかに消えたのでしょ

「いまでも、どこかに、おるかもしれんのう」

「はい、もしかすると飛び加藤は、生まれ変わって金ちゃんになったかもしれませ
ん」

「わしは、かとうじゃのうて、さとうじゃ」

「あら、金ちゃんは佐藤ですか。なら、飛び佐藤ですかね」

「【とびさとちゃん】かい」

「冗談はともかく、次は果心居士ですが」

「【かしんこじきちゃん】は、どんなげいをするんじゃ」

「果心居士は、数十名の人間を、いっぺんに殺す術を持っています。けれども果心居士が名をはせたのは、その予言力ですかねえ」

「なにを、よげんするんじゃ」

「それが恐ろしいことに、その人間の運命を予言して、すべて適中させるのです」

「じしんを、よげんして、ほしいもんじゃのう」

「果心居士は松永弾正（まつながだんじょう）という、悪名高き殿様に仕えていましたが、弾正が織田信長（おだのぶなが）に、滅ぼされ殺されるのを予言しました」

「よげんは、あたったのかのう」

「それは歴史が証明しています。それからこんどは信長が明智光秀（あけちみつひで）に、滅ぼされ殺されるのを予言しました」

「それは、わしもしつとる。ほんのうじのへんじゃな」

「はい、本能寺の変ののち、光秀が羽柴秀吉（はしばひでよし）に、滅ぼされ殺されるのを予言しました」

「おそろしいのう、わしはよげんして、ほしくはないのう」

「わたしもです。そののち果心居士は筒井順慶（つついじゅんけい）に仕えたのだが、秀吉に謁見（えっけん）したその日に、大峰山の修験者に殺されてしまいました」

「その、しゅげんじゃとやらは、かいじいの、せんぞかのう」

「はてさて、しかし果心居士がほんとうに殺されたのかは、だれにもわかりません。亡骸（なきがら）は残っていたものの、切り刻まれてだれのものやら」

「おそらく、いまも生きておるぞい。たまによげんをして、たまにあたるやつがおるじゃろ」

「たまにでは、果心居士ではありません。果心居士は、百発百中ですから」

「しかしのう、【かしんこじきちゃん】は、ごじぶんがころされることを、よげんできなかつたのかのう」

「そうですねえ。それを予言しなかつたところを見ると、殺されてなんかいないでしょうね」

「わしは、そうおもいたい」

「では続いて、忍者さながらの大泥棒、三羽鳥を」

「また、さんばがらすかい。ほかにないんか」

「例えば」

「さんばかたいしょう、とか」

「金ちゃん、莫迦には大泥棒はできません」

「それはそうじゃのう。して、そのさんばは」

「石川五右衛門、雲霧仁左衛門、鼠小僧次郎吉です。もし児雷也（じらいや）を加えれば四天王になりますが、児雷也は蝦蟇（がま）もふくめて謎が多いのでいずれそのうち」

「しっとるぞい。かまゆでの【ごえもんさま】、おににくわれた【くもぎりさま】、くしぎしになった【ねずみさま】」

「どうして大泥棒だけ、様、なんですか」

「ぎぞく、だからじゃ。【ぎぞくおぼけ】じゃ」

「しかしどこまで義賊かは、信用できませんがね」

「さまで、いうな」

「義賊なら釜茹でにはならないでしょう。ちなみに鬼に喰われたというのは、鬼平、つまり長谷川平蔵に捕らえられたということですね」

「そうじゃ。【くもぎりさま】は、ざっしでよんだぞい」

「いずれにしろ、この三莫迦、いえ、三羽鳥には、謎が沢山あります」

「なぞなぞ、かい」

「それなら、なぞなぞを出しましょうか」

「さあこい」

「どうして、石川五右衛門は豊臣秀吉に、釜茹での刑にされたのでしょうか」

「そらあ、【ごえもんさま】は、おおどろぼうじゃからのう」

「それだけでは釜茹でになりません。五右衛門は秀吉の命を狙ったのです」

「そらあつまり、【ごえもんさま】が、ひでよしの、てさきかってことか。【はっとりくん】と、かんけいがあるんか」

「当たりです、家康の手先。そしておそらく五右衛門は、服部半蔵の兄弟子で、そして百地三太夫の一番弟子」

「ももちたあ、ももか、もちか」

「桃でも餅でもありません。伊賀忍者の頭領ですよ」

「またでたか、【にんじゃおぼけ】の【さんだゆうくん】」

「しかしそれらは、釜茹での理由にはなりません」

「わかったぞい。【ごえもんさま】のにくは、うまいんじゃ」

「つまり、茹でて調理して、秀吉が喰ったと」

「ちがうかのう」

「自分を殺そうとした奴なんか、喰いたいでしょうか」

「まずそうじゃからのう」

「そろそろ解りませんか、釜といえは」

「おおお、わかったぞい。【ごえもんさま】は、ひでよしの、おかまをほったのじや」

「惜しい、逆ですよ。秀吉が五右衛門のおかまをほろうとして、拒否されたんですね」

「さかうらみかい」

「はい、五右衛門は芝居や映画とちがって、じっさいは紅顔の美少年」
「げっ、はつみみじゃ」
「わたしも、初喋りです」
「かいじいは、あいかわらずじゃのう」
「続いて、雲霧仁左衛門のなぞなぞです」
「さあこい。【くもぎりさま】のことは、ざっしでよんだから、くわしいぞい」
「どうして仁左衛門は、鬼に喰われたのでしょうか」
「そらあ、きまっとるわい。おにが、いちまい、うえだったんじゃ」
「残念。実は仁左衛門と平蔵は、双子の兄弟だったのです」
「なんと。そんなこと、かいてなかったぞい」
「そんなこと書けませんよ。役人が泥棒と兄弟だなんて」
「わしなら、かくがのう」
「では書いてください。兄弟の証拠は」
「しょうこは、なんじゃ」
「鬼と雲とは、切っても切れない仲ではありませんか」
「むむむ、かいじい、そうきたか」
「ではもうひとつ。どうして、次郎吉は自ら鼠小僧と名のつたのでしょうか」
「これも、なぞなぞかい。となると、なんじゃな、【ねずみさま】は、ねこがにが
て」
「いい線ですが、もう一歩ですね」
「ならば、てんじょううらを、はいまわるからかのう」
「たしかに、次郎吉は大店（おおだな）の天井裏を這い回りますがね」
「わかったぞい。ねずみが、なぞなぞでのうて、こぞうが、なぞなぞかい。【ねず
みさま】のひざこぞうに、ねずみのいれずみ」
「膝小僧に鼠の入墨。すごい発想ですね」
「あたりか」
「外れです。鼠小僧から連想されるものは」
「そらあ、ねずみみたいに、ちいさいこぞうじゃ」
「当たりです。じつは次郎吉は大江戸一の大男でして。それでごまかすために鼠小
僧と」
「そらあ、なぞかい。それとも、しんじつかい」
「謎と真実は紙一重」
「むむむ、ふかいのう」
「それでは、浅井家の【にんじゃおばけ】の話を」
「もうええわい」